



イベント・シンポジウム等実績報告書 配分事業費：617千円

SUAC映画祭

目的・趣旨

2017年度に異文化理解と地域交流の場づくりとして実験的に開催したSUAC映画祭の第4回目の開催（2017年度は2回開催）。H29年度からの「映画＋ワーショップ」という企画が、高校生から80代までの幅広い層の関心をひき、多くの来場者を得ることができている。特に、H30年度の開催では、浜松在住の外国人も多く来場した。また、地域の事業者、文化施設や市民団体からも引き続き映画祭との連携提案をいただくなど、映画というコンテンツを通して、大学が地域交流のハブとなる仕組み作りができつつある。2019年度は、この仕組み作りを完成させることを目的に、また、特に浜松在住の外国人との交流作りに重きを置き、大学と地域（4箇所程度）を会場に映画祭を開催する。

日時・場所

2019年4月1日から2020年3月31日
静岡文化芸術大学、はましんホール、黑板とキッチン

体制

（実施代表者）文化政策学部 芸術文化学科 准教授 高島 知佐子

共催・後援等

内容

2017年度に異文化理解と地域交流の場づくりとして実験的に開催したSUAC映画祭の第4回目を開催（2017年度は2回開催）。「映画＋ワークショップ」という企画が、高校生から80代までの幅広い層の関心をひき、多くの来場者を得ることができている。今回は昨年度までの来場者の意見をもとに、月1回の開催を試みた。「AIRLINE～東の時間旅行～」をテーマに、アジア太平洋を中心とした島国が舞台となっている作品を中心に8作品を上映した。ワークショップでは、映画監督や当事者、専門家によるトークを中心に企画した。具体的にはワークショップでは、「ラ・シュシュ」（浜松初のマクロビスイーツを提供するお店）オーナーのみどりや一恵さんによるトーク、本学下澤教授によるレクチャー、学生によるものづくりワークショップ（映画の地域の伝統柄のコースター作り）、浜松国際交流協会の協力による外国にルーツを持つ学生2人によるトーク「Canta!Timor」監督の広田奈津子氏によるトークを行った。

上映作品とワークショップ＆トーク

ドラゴン・ガール
監督 山崎嘉次郎（2017年制作）100分
ある日、ある島の村に伝説のドラゴンが現れる。そのドラゴンは、島の村人を救うために戦う。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。

Canta!Timor
監督 広田奈津子（2017年制作）100分
ある日、ある島の村に伝説のドラゴンが現れる。そのドラゴンは、島の村人を救うために戦う。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。

はじまりはヒップホップ
監督 ブリッジ・ビショップ（2017年制作）100分
ある日、ある島の村に伝説のドラゴンが現れる。そのドラゴンは、島の村人を救うために戦う。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。

あまくない砂糖の話
監督 山崎嘉次郎（2017年制作）100分
ある日、ある島の村に伝説のドラゴンが現れる。そのドラゴンは、島の村人を救うために戦う。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。

光にふれる
監督 山崎嘉次郎（2017年制作）100分
ある日、ある島の村に伝説のドラゴンが現れる。そのドラゴンは、島の村人を救うために戦う。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。この映画は、島の村人の生活とドラゴンの生活を描いた。

プログラム

月日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日
上映時間	18:30	19:00	19:30	19:30	19:30	19:30	19:30
上映作品	ドラゴン・ガール	はじまりはヒップホップ	あまくない砂糖の話	光にふれる	ドラゴン・ガール	はじまりはヒップホップ	あまくない砂糖の話
上映場所	はましんホール	はましんホール	はましんホール	はましんホール	はましんホール	はましんホール	はましんホール

結果・成果

一部のワークショップ（トーク）を無料にしたことで、映画を鑑賞した半数以上の方がワークショップ（トーク）に参加し、積極的な意見交換が行われた。特に、移民をテーマにした作品の当事者によるトークでは、参加者から多くの質問があり、浜松の多文化共生を身近かつ真剣に考える時間となった。また、今回は一部作品で、上映前にワークショップ（トーク）を行い、予備知識を得てから映画を鑑賞する形を試みた。参加者からは大変好評であった。一方、今年度は上映自体への参加者数が143名と昨年度までよりも大幅に少なかった。この理由は、月一開催にしたことで、効果的かつ十分な広報ができなかったこと、参加者の関心が分散したことがあげられる（台風の警報発令が予想された日があったことも一因である）。参加者の意見から、月一開催を試みたが、来年度からはこれまで通りの3日間程度の集中的な開催に戻し定着させていきたい。参加者が少なかったことは次回への課題となった一方、様々な社会問題を扱った作品とトークという組み合わせでは、これまでにないほど深い対話ができただことは大きな成果であった。

